新聞之新聞　2012年(平成24年)5月14日(月曜日)

フランスで紙芝居会議

日本発「紙芝居」世界へ

日本で生まれ育った紙芝居の国際会議が四月二、三日の両日、フランス・パリのユネスコ本部で開催され、フランス、スペイン、ドイツ、オランダ、スイスに日本の六カ国から、子ども図書館、児童文学者、教師ら六十人が参加した。日本の出席者は紙芝居文化の会（まついのりこ代表）会員十六人。

この会議は「ヨーロッパ紙芝居会議―平和のために紙芝居を」として、紙芝居について造詣の深いフランスのマルチメディア図書館、マリー・シャーロット・デルマス館長が発案。デルマス館長は出席者を前に「紙芝居はすぐれた文化であり、広めていきたい」とあいさつした。

一方、紙芝居の母国、日本を代表してあいさつした酒井京子紙芝居文化の会統括委員（童心社会長）は「紙芝居文化の会が二十三人でスタートして十一年になるが、まさかフランスで紙芝居の会議が開かれるとは思わなかった。まるで夢のよう。紙芝居は日本の文化財であり、この会議を通してみなさんと一緒に研究し、議論をしたい」と述べた。

会議初日は紙芝居文化の会会員による名作「おおきく　おおきく　おおきくなあれ」や「たべられたやまんば」、「あひるのおうさま」の実演、紙芝居の歴史についての講演があり、二日目は各国代表から、それぞれの国での紙芝居への取組みなどが報告された。

酒井氏は会議を振り返って「フランスからは、一部の女子刑務所で紙芝居が行われ、受刑者間のコミュニケーションの役割を果たしている。スペインのバスク地方では行政の支援が充実しているなど、日本は異なる活動が報告され、とても新鮮で大きな刺激を受けた。また会場から『間とは何か』と、紙芝居の原点を問う質問もあり、海外においても理解が深まっていると感じた。同時に、広く世界に紙芝居を伝えるためには、さらに理論研究が必要、との新たな意欲を持った」と成果を話している。

LA PETITE
BIBLIOTHEQUE
RONDE

日本を代表して、会議への期待を述べる酒井京子氏

2012年(平成24年)5月19日(土曜日)　夕刊　讀賣新聞

「ヨーロッパ紙芝居会議」　パリで開催130人が参加

紙芝居は海外でも「KAMISHIBAI」で通じる日本発の文化です。日本で出版された紙芝居が翻訳されて書店に並ぶパリで4月上旬、「ヨーロッパ紙芝居会議――平和のために紙芝居を」が開かれました。

紙芝居を海外へ広めている「紙芝居文化の会」（まついのりこ代表）と、パリ郊外の子ども図書館が共催。2日間で延べ約130人が参加しました。日本のメンバーはベトナムの紙芝居『太陽はどこからでるの』を上演したり＝写真（野坂悦子さん撮影）＝、原爆を題材とした『二度と』（松井エイコ作）などを披露したりしました。スペインの会員は、子どもたちの手作りの紙芝居を演じました。

「演じ手と観客との間に共感の世界を生み出す紙芝居の力を確かめ合うことができた」と、同会統括委員の酒井京子さん。同会では、東日本大震災の被災地で紙芝居を通じた交流を深めようと、6月23日に盛岡市で紙芝居講座を開きます。